

男B それでいいんだ。ちょうど欠員ができて、新規に補充も考えていた矢先だし、考慮の余地はあるんだよ。いったいどういうこと？

男A さんさん迷ったあげく……

男B うん。

男A 一種の消去法と言いますか、

男B 消去法？

男A はい。

男B ……

男A けつきよくこしかないことがわかったわけです。

男B ほう。

問——

男A (男Bの言葉の続きを期待し、妙に素直な気持ちになって) 具体的に言ってみようよ。

男B この(足元の鞆に視線を落とし) 鞆のせいでしょうね。

男A 鞆？

男B はい。

男A (鞆を見下ろし) 鞆……ねえ…… (怪訝な顔をして鞆を見つめ) 職

探しに持ち歩くには大きいね。

男B そうでしょうか。

男A (鞆を見ながら) 大きいよ。

男B ……

男A ……で、鞆がどうしたって？

男B ほとくの体力とバランスがとれすぎているんです。

男A バランス？

男B はい。ただ歩いている分には、楽に運べるのですが、ちよつとでも急な坂だとか階段のある道にさしかかると、もう駄目なんです。

男A 駄目っていうと？

男B 歩けなくなるんです。

男A 歩けなくなる？

男B はい。なんか急に重くなって、腰骨の間に背骨がめり込むような

……

男A 背骨が腰骨に？ (想像するだけで痛いというような顔をして、あらためて鞆を見る)

男B おかげで、運べる道が制約されてしまうわけです。鞆の重さが、ほ

くの行き先を決めてしまうんです。

男A (いざさか氣勢をそがれ) すると、鞆を持たずにいれば、かならずしもうちの社でなくてもよかったです。

男B 鞆を手放すなんて……、そんな、あり得ない仮説を立てても始

まらないでしょう。

男A あり得ない？ いや、手から離れたからって、べつに爆発するわけじゃないだろう？

男B もちろんです。ほら、今だってちゃんと手から離して床に置いてま

す。

男A ……わからないね。なぜ、そんな無理してまで、鞆を持ち歩く必要があるの……

男B 無理なんかしていません。あくまでも自発的にやっております。

男A やめようと思えば、いつだってやめられるからこそ、やめないんです。強制されてこんなばかなことできるもんですか。

男A ……

問——

男A それで、うちで採用してあげられなかったら、どうするつもり？

男B 振り出しに戻ってから、またあらためてお願いに上がることになる

でしょうね。……地形に変化でも起きないかぎり……

男A　しかしねえ、たとえばだよ、君の体力に変化がおきるとかさ、靴の重さが変わってぜんぜん歩けなくなるとか、宅地造成で、新しい道を選べるようになるとかさ……

男B　そんなにほくを雇いたくないんですか。

男A　いや、可能性を論じているだけさ。君だって、もつと自由な立場で職選びができればさ、それにこしたことはないだろう。

男B　この靴のことは、誰よりもほくがいちばんよく知ってます。

男A、あらためて靴を見つめる。間――

男A　(靴を見ながら) なんなら、しばらく、あずかってあげようか。

男B　まさか、そんなあつかましいこと……

男A　(興味を抑えられないというように) なかみは何なの。

短い間。

男B　大したものじゃありません。

男A　(無気味な笑いを浮かべて) 口外をはばかれるようなもの、かな。

男B　つまらない物ばかりです。

短い間。

男A　金額にしたなら、いくらぐらいになるの。

男B　べつに、貴重品だから、肌身離さずってわけじゃありません。

男A　しかしねえ、知らない人間が見たら、どう思うかな。

男B　……

男A　君はそう(男Bの身体に視線を合わせながら)腕つぶしの強いほう

でもなさそうだし、ひったくりや強盗に目を付けられたら、お手上げだろう。

男B、相手の心を見透かすように小さく笑う。年寄りじみた笑いである。笑うだけで、返事はしない。

男A　ま、いいだろう。(声をたてて笑い、額に手をあてがって相手の視線を押し戻すような仕草をしながら) べつに言い負かされたわけじゃないよ。でも、まあ、君の立場も、なんとなくわかるような気がするな。……それじゃあ、一応、働いてもらうことにしよう。本当ですか。ありがとうございます。

男A　それにしても、その靴は大きすぎるよ。君を雇っても、靴を雇うわけじゃないんだからね。事務所への持ち込みだけは遠慮してもらいたい。その条件でよかったら、今日からでも仕事を始めてもらいたいんだけど、どうだろう。

男B　けっこうです。

男A　じゃあ決まりだ。(机に戻りながら) 求人広告を見たってことだから、履歴書は持ってきたんだろうね。

男B　もちろんです。

男B、履歴書の入った封筒を差し出す。

男A　(受け取った履歴書に目を通しながら) で、勤務中、靴はどこに置いておくつもり？

男B　下宿が決まったら、下宿に置いておきます。

男A　大丈夫かい？

男B　どういう意味ですか？

男A　下宿から、ここまで、靴なしで辿り着けるかな。身軽になりすぎて、

途中で脱線したりするんじゃないのかい。

男B (爽やかな笑い声をたて) 下宿と勤め先の間なんて、道のうちには入りませんよ。

男A (笑みを浮かべて) そうか。

短い間――

男B あの、

男A 何？

男B 近くに不動産屋あるでしょうか？

男A 不動産屋？ ああ、下宿探しか。そうだね、早いほうがいいね。仕事始めてもらいたいし。

男B はい。

男A 知り合いの不動産屋、紹介しようか。

男B お願いします。

男A うん。ちよつと待つてね。今、電話するから。

男A、不動産屋に電話する。

男A あ、ニコニコ不動産ですか。セカンドハンドの永持ながもちです。……いや、こちらこそお世話になっております。実は部屋を探してるんです。……いや、私じゃないんです。うちの従業員が……あ、はい(男Bの方をチラッと見てから、電話の相手に) はい、そうです。……はい？ ……(男Bに) 独身かって？

男B 独身です。

男A (電話の相手に) 独身です。……はい。……今からそちらに行かせたいんですけど、よろしいでしょうか？(男Bに、小声で) いいね？

男B (小声で) はい。

男A (電話の相手に) はい。……じゃあ、よろしくお願いします。はい、ありがとうございます。失礼いたします。(電話を切る) ってことで、さっそく行ってくれる？ 今、地図描くから。

男B はい。ありがとうございます。

男A (描きながら) 部屋を見て、決まったら連絡してくれる？ 電話番号書いておくから。

男B はい。

男A、男Bに地図を渡す。

男A 夕方までに戻って来られるといいけど。

男B わかりました。じゃあ、さっそく行ってきます。

男B、鞆を置いて、出て行く。

男A、しばらくぼんやりするが、何を思ったか、男Bの鞆のそばに行く。

男A (鞆に向かって) 鞆よ、鞆。あなたのな、な、なみはなんですか？ なんてね。

男A、突然、鞆を持ち上げる。

男A ん？ 思ったより軽いぞ。なんだこりゃ。(二、三步、歩いてみて) なんてことない。いやあ、死体でも入ってんじゃないかと思ってただけ。(などと言いながら、事務所の中を歩き回る)

男A

鞆よ、鞆。(歌うように) あなたのなかみはなんですか? なんで
すか? ……あなたのな……(階段を上ろうとして、腰に痛みが
走り) 痛! ……なんだあ。急に重く……あ、いててて。駄目な
のか? こっちは。(腰をさすりながら) じゃあ(方向転換し) 上
が駄目なら下へ(と言いながら、もといいた位置に向かつて歩き出
すと) あれ、楽になった。これならいける。(少し歩いて立ち止まり、
上手を見て) こっちはか?(と言って歩き出し、袖中に消えるが、
しばらくしてまた戻ってくる) 鞆よ、鞆。どっちならいんだ。
……まったく……こっちはか?(と言いながら下手に歩き、そのま
ま入口から出て行く)

誰もいなくなった事務所の机で、突然電話のベルが鳴る。鳴り続
ける中、ゆつくりと明かりが落ちていく。

—幕。